

チャランゴ製作と 福岡稔



1976年、福岡稔が初めてボリビアへと渡った目的は、本場でチャランゴの奏法と製法を学ぶこと。日本で最初にチャランゴという『珍しい』楽器を始めた福岡は、木工が得意であったこともあり、見様見真似でチャランゴの製作も始めていた。もともとプロの演奏家になることは微塵もアタマになかった福岡にとって、奏法より製法の方がメインだったに違いない。

エルネスト・カブールより紹介されたいくつかの工房の中から、ミノルはコチャバンバの名工レネ・ガンボアの門を叩いた。当時、ボリビア随一の規模を誇るガンボア工房では多くの職人が働いており、それぞれが自分の楽器を製作していた。言葉も分からない新参者のミノルは、職人たちのアシスタントとして、木製・キルクインチョ双方の製作作業を、一から学んでいった。

やがて、工房で最も腕の良いアンヘルという職人と仲良くなり、工房の閉まった後も夜遅くまで、製作上の秘訣や注意点をマンツーマンで指導を受けるようになった。ちなみにアンヘルは、腕に絶対の自信を持っていて、自分の手がけたチャランゴには表面版のウラに鉛筆でAngelというサインを入れていた。

アンヘルの紹介で、同じコチャバンバにあるインティ工房にも出入りするようになったミノルは、ここでも自分の作業台に向かって、チャランゴを製作するようになる。ガンボア工房に比べてずっと小さなインティ工房では、より細かな、深い技術やノウハウを学んでいった。

毎日の生活をコチャバンバのチャランゴ職人として過ごした数ヶ月、時折工房を訪ねてくる地元の音楽家たちの試奏する音色に大きな刺激を受けながら、ミノルはチャランゴという楽器を、ボリビアの側から見ることを学んだ。それはそれは、大きな経験であった。

